

ヨーロッパ諸国における地誌学の研究動向と 新しい地誌学に関する中心概念

作野 広和*

Hirokazu SAKUNO

A Study of Regional Geography in European Countries and Basic Concepts of New Regional Geography

[キーワード：新しい地誌学，実証主義地理学，ヨーロッパ，フランス，ドイツ]

I. はしがき

第2次世界大戦後に登場した実証主義地理学は従来の伝統的地理学を批判し，地理学の革命的変革をもたらした。論理実証主義哲学にもとづき，Kuhnの科学革命¹⁾などの影響も受け計量革命をひきおこし，実証主義地理学の発展に至った。

このような実証主義地理学の発展は，従来の伝統的な地誌学²⁾中心の地理学に対する反発であるといえる。そのため，実証主義地理学の発展とは裏腹に地誌学は衰退していき，ドイツでは地誌学不要論が飛び出すまでになっていた³⁾。

その後，実証主義地理学も強く批判を受けるようになり，そのアンチテーゼとして人文主義地理学，マルクス主義地理学などが発達するとともに，実証主義地理学の中では行動地理学や時間地理学などがもてはやされるようになった。このように，地理学のパラダイムはめまぐるしく変化していったが，実証主義地理学の批判の受け皿として地誌学が注目されることはただちにはなかった。

しかし，1970年代終わりごろからわずかずつではあるが，地誌学の重要性を見直す動きがあらわれた。森川(1982)によれば地誌学の再評価はGuelke(1977)やGregory(1978)に端緒があるとしている。いわゆる新しい地誌学の登場であり，1980年代に入り英語圏やフランス語圏において地誌学の再生を求める動きが活発となった。1987年にはオランダのユトレヒト大学で地誌学の再興に関するセミナーも開催され，これまでの新しい地誌学の動向を総括する形での編書も刊行された(Johnston, Hauer and

Hoekveld, 1990)。

その後，10年近くが経過したが，わが国においては地誌学がいかにあるべきかといった議論はもとより，こうした海外の地誌学研究に関する動向すら十分に把握されているとは言い難い。わずかに，森川(1982；1992；1997)がその動向を逐次伝えているに過ぎない。

確かに，わが国において地誌学と比較して系統地理学の研究が圧倒的に盛んであることは事実である⁴⁾。しかし，エアスタディや地理学の海外地域研究など地誌学と関連する問題には多くの地理学者が関心を寄せているとともに，学校教育現場や社会からのニーズは依然として地誌学にも大きく向けられている⁵⁾。今日，地誌学の本質的問題に正面から向き合い，地誌学と狭義の地理学との関係や今後の地誌学がどうあるべきかについて一層の論議が必要ではなからうか。

本研究ではこのような問題意識に立ち，地誌学と地理学の関係，新しい地誌学の研究動向や中心概念についてヨーロッパを中心とした研究成果をもとに考察することを目的とする。

一般的に伝統的な地誌学は広義の地理学の重要な部分を占めており，元来両者を厳密に区別することができないといわれている。そこで，本稿では第II章で第2次世界大戦後の地理学の潮流を整理し，第III章で地誌学が有する本質的な概念と理論を整理することにより，狭義の地理学とは異なる地誌学が本来目指す方向性について考察する。続く第IV章ではヨーロッパの地誌学に限定し，伝統的地誌学における中心概念がいかなるものであったかを整理し，地誌学と地理学との関係を検討する。第V章では第II章で述べたような現代地理学の潮流の中から生まれた新しい地誌学がどのような概念によって形成さ

* 島根大学教育学部社会科教育研究室（地理学）

れ、どのような方向を目指しているのかをヨーロッパを中心とした研究成果の動向から把握する。

なお、新しい地誌学の再興は必ずしもヨーロッパのみでみられる動きとは限らない。しかし、本稿においては伝統的地誌学の中心概念と新しい地誌学の中心概念の比較を容易にするためヨーロッパの研究成果に限ってサーベイしていることをあらかじめおことわりしておく。

II. 現代地理学の潮流

1. 新しい地理学の誕生

RatzelおよびVidal以降の地理学の流れは、どちらかといえばVidalの地理学思想が主流となって継承されていった。Ratzel以後のドイツにおける地理学では、彼の思想がむしろ否定される形で、Richtshofenのコロロギー学派が主流となっていった。また、Ratzelの環境決定論を克服するため、Schlüterによる地理学の対象を可視的要素に限定した景観論が台頭して大きな影響を与えた。さらに、Schlüterに対するHettnerは、地理学の対象を複合体としての地域とする説明的地誌学の確立に貢献した。Hettnerの地理学思想はWindelband、Rickertの科学哲学に根拠を置き、地理学は歴史学とともに、個性記述的な学問に属するものとされた。この地理学思想は1920年以降の地理学界では支配的となり、Hartshorneによってその後の地理学に引き継がれ、いわゆる伝統的地理学の主流となっていた(加藤, 1987)。

新しい地理学は1950年以降、アメリカ合衆国、スウェーデンに始まった地理学の革新運動によって成立し、計量地理学あるいは理論地理学とも呼ばれている。この新しい地理学への革新運動の火付け役となったのがSchaeferであった。Schaefer (1953) は1920年以降支配的であったHettnerおよびそれを継承し、発展させたHartshorneの歴史的地理学思想を鋭く批判した。彼は伝統的地理学における歴史主義の個性記述的な点を最も批判した。そして、新しい地理学は空間における法則定立的であるべきだと強く主張した。この新しい地理学はアメリカを中心として急速に広まり、Bunge (1962) はその象徴的著作である。

この時期に計量革命がすすんだのは、当時のアメリカが地理学の学問としての存続の危機に直面していたからだと考えられる(野上・杉浦, 1986)。当時のアメリカでは自然科学分野のみならず経済学を中心に社会科学においても計量化がすすみ、地域を計量的に分析診断する地域科学や社会を物理学的手法で分析する社会物理学という全く新しい学問が誕生してきた。これらの新しい学問

はデータの計量化、統計学的方法を最初から学問のベースとし、法則定立を第一義とした学問であった。したがって、地域現象に関わる法則性は地域科学や社会物理学の最も得意とするところで、伝統的地理学はその面で大きな遅れをとっていたのである。この危機を乗り切る方策が、ワシントン学派による立地論、あるいはBerryによる多変量解析の地理学への取り込みであった。

以上のようにコロロギーに安住して科学主義から立ち遅れていた伝統的地理学にとって、計量革命は地理学が学問として生き残るためのやむを得ない選択であったともいえる⁶⁾。

2. 新しい地理学の特徴

伝統的地理学においては、全体論的、歴史主義的科学思想に依拠していた。これに対して新しい地理学は論理実証主義的な科学哲学に依拠している。ここでは、個人の思弁的方法による原理の確立や道徳律を排除し、絶対確実性を論理学、数学にのみ認め、これらの科学論理に基づく分析操作によって得られた成果のみが真実であるとする世界である。この論理実証主義に依拠する新しい地理学の目的は、地域の理解やその記述ではなく、あくまでも空間における法則性の追求である。この新しい地理学の立場はコロロギー学派に対し空間学派とも呼ばれている。この空間学派の主張する新しい地理学の特徴は野間 (1976) を参考にすると次のようにまとめられる。

- (1) 全体論的、記述的な地理学から理論、抽象的一般化を求める法則的な地理学を指向し、分析的方法、仮説・モデル・予測が重大視する。
- (2) 定量的手法すなわち統計的・数学的手法が取り入れられる。
- (3) リモートセンシング等地理的情報収集に新しい機器が開発され、コンピュータによる情報処理を用いることが多い。
- (4) 空間関係の中に現れる諸種のプロセス研究を重視。
- (5) コンピュータによるシステムとしての自然・文化および空間を考察する。

以上のように新しい地理学の誕生は、従来の地理学の概念と方法を大きく変えていった。一般に計量地理学という場合、統計的方法の技術論に終始しがちであるが、技術から出発して地理学の基本的性格も変えていったことに注目されなければならない。革命と呼ばれるものこのような認識に基づいているからであろう。技術論に限ってみても、計量革命の前後で大きな変化がみられた。それは、「記述統計学から推測統計学へ」という変化であった。このことは、帰納的方法に基づき、大量観察、大

量調査を重視していた従来の調査のあり方にも影響を与えた。推測統計学においては、「観察データは量の大小を問わずあくまでも標本であり、標本による母集団の代表性が問題とされる」からである。

新しい地理学ではSchaefer (1953) も分析しているように地理学の対象を極めて限定的に捉えている。全体論主義から脱出し、法則定立のみを追求しようとする以上、必然的に他を捨象していかざるをえなくなる。しかし、この方法を推し進めていけば、数学そのものと大差がなくなってくるとも考えられる。このような危惧が後の新しい地誌学批判にもつながってくる。

3. 現代の地理学

計量革命によって始まる新しい地理学は、コンピュータの発達とあいまって著しく発展し、一時は伝統的地理学は空間学派によって駆逐されたかにみえた。しかし、この計量革命も新たな問題点がいくつか指摘されるようになった。それらは第1に新しい地理学が求める科学的方法が物理学をモデルとする精密科学の方法論を地理学に適用したものであるが、その方法論で解決される地理的事象は限られたものに過ぎなかったということである。つまり、分析不可能な命題を科学にあらざとして排除すると、あまりに多くのものが失われるのではなかろうか。第2に、本質的には科学方法論上要請された計量化が、それ自体目的化されてしまったことである。すなわち、計量化が分析操作の技術開発とされてしまったことである。第3は論理的形式化を重んじるあまり、論理的構文のみを重視し、意味論を軽視ないし無視することになった。

以上のような新しい地理学に対する問題点や限界性が指摘されてくると、再び伝統的地理学の方法の見直しや、あるいは1970年代以降ラディカル地理学や現象学と結びついた人文主義地理学の台頭を見るようになったのである。川島 (1986) はラディカル地理学の台頭の背景を以下のように説明している。

計量化傾向を含めて経済地理学の理論的指向がややもすればその理論的精緻化とは裏腹に、社会的有効性を喪失しがちなことに対する反省から生じているからである。国際間の南北問題、国内の地域問題、都市問題に対する社会的認識の高まりは、経済地理学の主流にみられる没価値的思想、体制や機構に無関心な理論に改めて再検討を迫るものであった。

確かに、このラディカル派の台頭とその主張は計量主義の地理学にとって厳しいアンチテーゼであった。しかし、このラディカル派も現在のところは問題提起の段階

に留まり、計量地理学に代わるさらに新しい地理学の概念と方法を提案するまでに至っていない。

III. 新しい地誌学の誕生と地誌学における概念と理論

1. 新しい地誌学の誕生

前章で述べたように、第2次世界大戦後、実証主義地理学の発展とは裏腹に伝統的地理学は後退していき、それと同時に伝統的地理学の中心的存在ともいえる地誌学は批判的となった。しかし、実際には大半の地理学者が地誌学を批判したかという必ずしもそうとは限らない。他方で、地誌学に対して単に無関心となっていただけの地理学者も多数いたはずである (Hockveld, 1990)。これらの地理学者たちは都市地理学、農村地理学、経済地理学のように系統性のある下位分野のなかで地理学研究をひたすら推し進めていったと思われる。また、地誌学を激しく批判した地理学者たちは空間的な社会科学としての新しい地理学に対し、地誌学を時代遅れの記述的学問としてレッテルをはった。この結果、地理学者たちからは伝統的な地誌学が視野から消えていってしまったと考えられる。

しかし、このような状況にもかかわらず、ドイツやフランスでは地域に関するモノグラフは刊行され続けたことを見逃してはならない。だが、残念ながらこのようなモノグラフが地誌学的研究の進歩にどう貢献すべきかについては議論がなかったように思われる。一方で、これらのモノグラフにも問題がなかった訳ではない。それらは、その地域に特有の事象を過度に強調すること、他地域との間における一般化の不足、他の社会科学で受容されている研究方法や技術などを十分に活用しないこと、特にドイツやフランスにおいては景観を目的とした研究が多く、社会現象や社会問題を明らかにする研究が十分でないこと、などがあげられる (Stewing, 1979)。

2. 地誌学の概念と理論

主に系統地理学を重点に研究する地理学者に対して、地誌学に携わる地理学者は概念的な機構や論理の発展と利用にうといと言われている (Hoekveld, 1990)。ところが、フランスやドイツを中心とした古典的な地誌学者は、多くのモノグラフから経験的な内容構成にもとづく理論的構造や地理学的パラダイムを生み出しているといえる。

地誌学は場所に関する学問であり、場所とは地域を意味しているが、空間的属性を持った対象とはいいいがたい。

後者は系統地理学で扱われ、地誌学は研究対象が地域であるというだけである。このことから、地域は地理学者が創った精神的構造物であるともいえる。このような状況に対してWhittlesey (1954) は次のように述べている。

「それは理知的な概念、つまり地域的な興味や問題に関係した特徴を選択することによって、また無関係だと考えられるすべての特徴を無視することによって創造された考えの目的を実態化することである。」(Blaut (1962)による)。

この地誌の概念はAAG委員会が1954年に示したような地域単位の属性と関係している。これは、換言すれば地誌における概念は地域の階級に関係するという考え方である⁷⁾。

ところで、Stewig (1979) によれば、地理学者は2つのレベルに進んでいると述べている。第1は一般的な理論的フレームワークやモデルの構築であり、第2にはより限定した理論の利用である。これらの媒介理論から、地理学者は問題やテーマに対する仮説と説明を引き出すことができるとしている。古典的な概念がパラダイムの策定を助けるものと同じであるということは、以前から知られていた。より本質的な一般理論的フレームワークと特殊理論がないので、これらのパラダイムが一般理論的フレームワークを提示しているといえる。例えば、Buttimer (1971) は以下のことを示している。フランス古典地理学のパラダイムは「傘」や「鍵」型概念に根ざしており、1940~1960年代に分析的に明らかにされてきた。新しい概念が一般理論モデルとして利用されてきた古典的地誌学の概念に十分に取って代われるか、という問題を扱う前に、これらの概念に焦点を当てる必要があるのではなかろうか。

IV. 伝統的ヨーロッパ地誌学の中心概念

1. 伝統的フランス地誌学の潮流

ヨーロッパでは伝統的地誌学者 (P. Vidal de la Blache, A. J. Herbertsonなど) は人間中心の生態的システムとして地域を考えた。後の世代 (O. Schluter, C. O. Sauer, A. Demangeonなど) は地域をまず景観としてみた。

Buttimer (1971) は伝統的フランス人文地理学の中心概念をまとめ、それらを創始者VidalがRitterやRatzelから受けた思想のなかに位置づけた。ドイツロマン主義、つまり個人と自然の二元論も伝統的フランス地理学に基礎をおいていたが、それはVidalが関係する一連の概念の中で確かめられている。たとえば、Buttimer (1971) は「自然」を人間中心の概念「環境 (milieu)」つまり地

球上での人間生活の組織的に統合された物理的あるいは生物的な下位構造に織り込まれているとしている。彼は地球規模で大きな自然領域を認識し、それは異なった人々の「生活環境 (milieux de vie)」として提示したのだ。彼の論によれば、世界の人々はこれらの偉大な「生活環境 (milieux de vie)」の背景の中で研究されるべきだとしている。いいかえれば、いかに人々が「生活様式 (genres de vie)」またはライフスタイルを作りだす中で、これらの異なった「生活環境 (milieux de vie)」の自然資源を適用しているかということである (Buttimer, 1971)。この「生活様式 (genres de vie)」概念はVidalの中心的な見方となった。彼はこれを生活や歴史的要素、人間社会へのエコロジカルな見通しの統一された機能パターンを意味するときに使った (Buttimer, 1971)。Vidalのもう一つ概念である「文化 (civilization)」は集団、その習慣、価値観、態度や心理学的な性格つまり「精神的側面 (mentality)」の世界的視野を含んでいる。「文化 (civilization)」は「生活様式 (genres de vie)」を管理し、それは自然における「生活環境 (milieux de vie)」の応用である。それゆえ、「文化 (civilization)」は同じ環境を共有している異なったグループを主として説明するのである。

RatzelのようにVidalはすべての場所は他の場所と関係した点を持っていると考えた。人や物の接触や交換を促進したり妨害したりできるので、これらの関係した点は重要である。流通はグループが限られた自然状況を打開することを可能にする。Vidalによると、流通は20世紀の都市産業世界の出現を理解するうえでの中心概念を構築している。「region」「pay」「contrée」はVidal (1896) が紹介したもっとも複雑な概念である。それは互いに影響し変形する多くの特色と関係している。それらの組合せは「地球上の組織が従う一般的法則を表すシンケージ」と称している。VidalとBrunllesは2層の方向性を持った。彼らは一般化と法則を、これらの働きのローカルな「enchaînement」と同様に研究したかったのだ。Vidalによるとこの個性は土地「paysage」の物理的 (自然的) 観相のなかで見えるようになるとしている。「paysage」の概念でBrunllesは「文化 (civilization)」とそれに付随する「生活様式 (genres de vie)」を包括した。それゆえ「paysage」は地域の表面を示すのである。最後の中心概念「人口」は、VidalもRatzelも地理学を場所の研究として定義したにもかかわらず人間中心の研究における基礎と考えられる。Vidalは彼の概念的なフレームワークの中で密度や分布、中心地の動きという人口の特徴もあげた。Brunllesは彼の地域研究に系統的な方向性を与えることで地域生活のグ

イナミックな様相を強調した。彼は「環境 (milieu)」と「生活様式 (genres de vie)」の概念を維持した。後者の概念はしかし、彼らの生活に繋がっているかぎりの精神性や伝統などと合体した働きとして定義されていた。

2. 第2次世界大戦後の地誌学の中心概念

第2次世界大戦後、Vidalの中心概念は再検討された。自然とその法則の研究は自然地理学に任せられた。というのも、自然はより一層物理的条件へと変化したからだ。「生活様式 (genres de vie)」の概念は、それが1940年代と1950年代にも依然として研究されていたにもかかわらず、その後衰えていった。これは小さな地域が大きな地域へと統合されてゆくことを通して、相互作用とコミュニケーションにおけるローカルな環境への適応がみられた結果である。

例えば、システムアプローチは経済システム、労働力分散、地理的ライフスタイル、空間組織といった概念の利用を進めた (Buttimer, 1971)。

「流通はその経験的な認識のなかで、社会ごとの空間の特徴やある程度の組織の見出しとして、新しい考え、技術、野望の流布者として、そしてそれゆえ地域変化の創造的な力として広範囲に役立っている。」

(Buttimer, 1971)

「空間組織」は定義さえもされていないにもかかわらず、Kostrowicki (1975) や Claval (1984) では新しい中心概念と考えられている。1950年代と1960年代では、それらは人口や財源あるいは人工物の空間パターンを説明するために、中心地理論、他の立地理論、土地借用理論、相互作用と行動理論などの理論の助けを借りて、一層利用されるようになった。このことから、空間組織もまた伝統的地誌学の中心概念と考えられる。しかし、ここでは土地利用、知覚でき評価できる所有者制度、社会要素間のコントロール関係の複合として、そして共に地域を形づくる地球表面の部分として定義する。これらの関係は相互作用とコミュニケーションのパターンの中で現われている。この空間組織が経済的にかなり説明されているにもかかわらず文化地理学者と社会地理学者はこの方法をフィールドワークで活用している。

資本が空間組織の中で重要な役割を演じていることが、地理学者たちにとって次第に明らかになってきた。元来、資本は地方の土地所有者や都市の豊かな商人の手による地方的資産であった。しかし、銀行の発達がこの状況をかえたといわれている (Labasse, 1955; 1972)。銀行業は資本の地域的な権威の一部を消失させ、資本は大都市に基盤をおく国際的な金融に含まれるようになった

(Thrift, 1986)。しかし、投資家や個人に対する信用の拡大は地域的な生活に今日のように深くは浸透しなかった。

「環境 (milieu)」の概念はよりルーズに使われるようになり、最終的には周辺環境や自然状況を意味するようになった。それは地域、地域的相違、空間といった用語に置き換えられがちになったことから明らかである。このプロセスの中でそれは地表の一部としての物質的な意味を失い、抽象的な概念になった。あいまいだが重要な「文化 (civilization)」の概念もまたその包含する意味の多くを失った。それは「生活様式 (genres de vie)」と生活もしくは景観の中で社会が造り出した形態の関係の中において説明的な方法として使われる。

フランスにおける地域の概念としてVidalの‘region’から「その骨組である都市のパターンによって刷新された生産と消費の地域 (Dumolard, 1980)」へ、そしてさらに複雑な空間カテゴリーへの進化は、ドイツで最も閉鎖的に進行していった。景観や地域の観相の表現への強い傾斜にもかかわらず地誌はたびたびHettnerの地誌表現によって決定された。Hettnerは自然発生的な現象とその形態の領域、動植物の領域、人間性の領域を地域記述の要素として区別した。

彼はしかし、地誌は単なる記述活動ではなく原因関係の研究だと主張した。人口と自然環境の間の相互結合を強調する強い環境主義への傾斜の時代の後、発生学的機能的に景観形態学に基礎をおいたメインピックの時代が長く訪れた。1960年代初頭には、空間組織に焦点をあてた新しい段階が始まった (Thomale, 1972)。ドイツにおける地域研究へのこの機能的アプローチの始まりはすでに1930年代にあらわれていた (例えば、BobekやChristallerに代表される研究者の手による)。第2次世界大戦後、原因的、歴史的、形態学的アプローチは次第に機能的アプローチに取って代られていった (Lichtenberger, 1984)。フランスでも同様な潮流であった。

3. 伝統的地誌学から新しい地誌学へ

フランス、ドイツ地誌の近年の歴史は、古典的時代の概念的分析的解釈を指向している。ドイツにおける1950年代と1960年代の地誌は空間組織がたびたび経済概念として考えられる一方で、「文化 (civilization)」と景観の概念は無視されていた。「文化 (civilization)」は「演技者の地域的自己同一化」、 「空間的な選択」のような概念へと変形してきたようだ。しかし、それはもはや国家レベルでもその構成地域でも熱心に研究はなされていない。

「民族的性格」といった概念も見捨てられてきた。プ

ロセスの中で洞察は都市システムや産業システムもしくは生活の都市基盤組織のような近代地域システムの性質へと進歩した。地域の空間組織が都市と後背地の相互依存ペアとして研究された期間の後、相互連鎖した日常的都市・農村システムとして地域研究は進歩した (Martin and Nonn, 1980)。

都市地理学、農村地理学、経済地理学などの系統諸分野の発達の結果は、地誌の地位に取って代ったあいまいな用語「空間組織」の重要性を見いだした。同様の事象が「人口」「集団」という用語にも適用される。この区別された人口と高度に人工的に制度化された下位構造・上位構造の間には多くの関係がある。多くの場合地域は別の場所におかれている制度や組織の領域的範囲に圧迫されている。もちろんこれは地域構造や居住者の日常システムに影響する。それゆえ、組織はもはや「生活」のような見出しの下には含まれない。それらは地域や地方を国家、州、そしてときには世界と結びつける。特に州の多くの要素のなかでは、制度システムは「社会の上位構造」の一部である (Johnston, 1982)。

古典的パラダイムにおける基本的な理解としては、ドイツと同様フランスにおいても地誌学からそのグランドセオリーを奪い取った。機能主義はドイツの'Länderkundliche Schema'と古典的なフランスの'enchânement'の考え方にダメージを与えた。生産、住宅、分布、経営と政策、集団行動などの地域的次元に関係した、異なった理論の財産は包括するフレームワークへの基礎は提供しなかった。それは地域でおこる現象の研究への理論的な試金石を提供した。1970年代と1980年代には科学的知識の基礎となる特徴についての理論的な論議が「実証主義者」「リベラル」「ヒューマニスト」「マルクス主義者」「構造主義者」等の間で討論された。特に、「マルクス主義者」と「構造主義者」は地誌学にとって新しい判例となる概念的フレームワークを提唱している。

V. 新しい地誌学の潜在的な中心概念

1. 新しい地域の見方と地誌学の対応

伝統的なフランスとドイツの地理学によって記述された地域は、多かれ少なかれ農村社会に基盤を置いたものであった。

新しい地理学が発達すると時期を同じくして、歴史学者、社会学者、経済学者などは地域における、特に都市の新工業的な社会とその結果の空間組織の変化を形づくるプロセスに対して重要な研究成果を発表してきた。彼らのモデルは世界経済という考え方を背景にした資本主

義を説明することにあるといえる (Wallerstein, 1974; Braudel, 1979; Vries, 1984)。

今日、世界の産業生産の構造はもはや生産専門化や地域連携のラインにそって組織されてはいないが、伝統的な垂直集積のラインには沿っている (Grotewald, 1971; Humbert, 1986; Dicken, 1986)。近代の工業化は工業、商業、財政、政府などにおける相互作用を研究することによって理解される。この生産の新しい組織と並んで、世界都市の新しい階層構造が既存の国家的都市システムに大きく影響を与えてきている (Friedmann, 1986; Brunn and Williams, 1983)。この結果、今日における地域の理解は伝統的な概念的フレームワークによって分析可能なタイプから別のタイプへと移動する結果となった。

現代社会においては国際経済、民族国家、世界都市、国家的都市・集落システムなどの地域をあらわす新しいキーワードによって把握することが有効となってきた。

このような新しい概念の地域のうえに、地理学者たちは新しい一般的概念的フレームワークを構築しようとした。地理学者たちの考えの根底には、地域が理論的な構成物であるという考え方があった。しかし、これらの構成物は現実のなかで検証されねばならない。このような中で Johnston (1986) は地域に対する新しい一般概念的フレームワークを見だし、「場所のモザイク」として世界をとらえようとした。以下では、このフレームワークに基づいて、新しい地誌学において求められる中心概念を検討することとする。

2. 新しい地誌学の潜在的な中心概念

1) 世界システム

世界システムは「地域の背景」の別の表現ともいえる。それは、相互に関係した経済的、政治的、社会的、文化的活動から成立しているといえる。あるいは、狭義では原材料、生産物、労働力、資本などと関係した市場関係の相互連携したネットワークとして考えられている。場合によっては、資本主義に基盤を置く経済的世界システムを政治的な世界システムと等しいものとみなす。しかし、後者を独立したものとみるほうが賢明であると思われる。

このような考え方にもとづき、地誌学においても世界システム概念を用いて研究をすすめることが可能ではなかろうか。また、世界システムを構成している部分としての地域を解明する手段として地誌学がその役割を發揮するのではなかろうか。

2) 空間組織

空間組織は全体論的な概念にもかかわらず、分析的経

験的な手法に適したものと見える。それはまた、規則と手段が考慮される限り、制度上の上位構造を含んでいる。何よりも空間組織は関係の概念であるといえ、それは土地利用、日常的都市システム、空間パターンなどにあらわれる関係を示している。

この概念は系統地理学でも扱われるが、ミクロスケールにおける空間組織の把握は必ずしも一般性が高いとはいえない。むしろ、空間組織がなぜ、どのように形成されたかを明らかにすることが地域の論理を見いだす有効な手段になり得ると思われる。その結果、新しい地誌学の概念的フレームワークとして空間組織の解明に期待がかかるのではないだろうか。

3) 人口

空間組織を作りあげる組織的な要素が地域人口の結果だといえる。しかしながら人口と空間組織とを同一のモデルの中で扱うべきではない。その地域的な分布、密度、移動はその地域の空間組織からはかなり異なっていると思われるからである。さらに、地誌学者は第一義的に地域的特色を解明することが使命であり、人口の地理学的特色を解明することとは目的を異にする。

人口地理学とは異なった、個別地域における人口に関する地域的特色の解明は地誌学に課せられた一つの使命ではなからうか。

4) 社会構造

空間組織はそれら自身の関係を取り巻いているが、もし社会構造が広く定義されるなら、それは伝統的生活構造や雇用構造を含まれると思われる。しかし、社会構造を狭義に定義した場合、生活構造や生産システムは別の概念でなければならない。

5) 集落システム

集落システムは都市だけでなくそれより下位の町村や小村を含む。それは人口の基盤や産業の物質的なシェクターを地域単位化する。

集落システムは社会構造や世界システムなどの概念と人間との間を結合する役割を果たす概念であるといえる。

6) コミュニケーションシステム

コミュニケーションシステムは物質的な下部構造の一部を共有しているが、集落システムとは区別されるべきである。言語・ローカルテレビネットワーク、地方・全国新聞のような情報伝達手段はその知覚、態度、人口集団の価値観への影響力を通して地域の相違にインパクトを与えている。

コミュニケーションシステムは「地域のアイデンティティ」にとって欠くべからざる条件である。国家における地域的連関はコミュニケーションシステムによって形

成される場合が多い。特定の地域や地域外の情報は全国・地方新聞と同様にテレビによって伝えられるが、情報は地域において発する側に選択肢が得られるため、地方主義に影響を及ぼすことも可能である。

このような新しいキーワードともいえるコミュニケーションシステムから地域を説明することは、新しい地誌学の一つの方向性を有しているのではなからうか。

7) 自然

地域の「自然」とは世界の生態システムの一部であると考えられる (World Commission on Environment and Development, 1987)。しかし、従来の地誌学においてはより限定された意味として用いられている。生活と自然の連鎖は永遠のものであるが、経済的、技術的、制度的なものによってその影響が制御されている。もし、自然と空間組織間の関係が見いだしにくいとしても、その下位構造を含んだ集落システムとの関係は見いだすことができるであろう。同時に、自然は地域の相違、またはそれ自身の権利か空間組織による介在者における要素なのである。

系統地理学において自然地理学と人文地理学の乖離が著しい現代においては、地誌学が両者を融合させるといふよりも、地誌学から自然へとアプローチしていくべきではなからうか。

8) 文化 (civilization)

地誌においては、文化 (culture) は重視されていない。時として、文化 (culture) は研究された社会かコミュニティの間の区別された特徴を説明する地味な要素でしかなかった。第2次世界大戦以前には「民族の特徴」「コミュニティの特徴」についての多くの研究が著された。1950年代と1960年代の地理学の専門化は、確固たる方法論と地位を持つ科学に地理学を列席させるために絶対必要なものであった。しかし、それは地理学から文化 (civilization) を記述する伝統的な方法を奪い去った。民族の特徴も地理学的分析にはあまり適合しなかったし、その研究は偏見や風刺ではないかと怪しまれた。民族の特徴に関する研究は文化人類学者と社会心理学者に任されていった。

歴史的には、地理学における文化的な見通しが「専門化」の結果として制限されたのは興味深い。例えば、アングロアメリカにおけるコミュニティ研究の伝統は、1950年代と1960年代における社会科学の「社会学化」運動の攻撃とつながっている。おそらく社会構造・制度・コミュニケーション研究の助けを借りて、文化 (civilization) の概念は再び地誌学のなかに受け入れられるであろう (Buttimer and Claval, 1987)。

3. 新しい地誌学が目指すべき方向性

概念的なフレームワークは地域発展の歴史的背景のモデルとしてみられるべきである。地理学者の観察する地域の差異とは、その地域的属性の選択に依存している。もし、観察者が人間中心的な立場をとったとしたら、地域の相違は相互の関係における明瞭な原因・結果と、社会構造・生活・空間組織の3つの要素に現れるであろう。このことは地域における自然と集落システムのなかに存在し、コミュニケーションシステムを通して作用する。それらは世界システム、国家、文化 (civilization) といった側面と、人口の量的発展と自然によって影響される。これらすべての結果として、地域の差異は歴史的プロセスの中で変化する。その結果、複雑な実世界のなかで意味のある地域を見つけるための潜在能力も変化する。地誌学は地域の差異のプロセスを説明する理論に集中すべきである。これらの理論は構造的なレベルで構築されなければならない。

VI. むすび

本研究は地誌学の存続と再構築の動きがさかんなヨーロッパ諸国、とりわけフランス、イギリスを中心とした研究動向から、新しい地誌学が何を目指し、その方向性はどのような概念を基礎に据えているのかを明らかにしようとした。

その際、地誌学の理論あるいは基本的概念と地理学全体のパラダイムとを比較することにより、その特徴を明らかにしていくことを念頭に置いた。具体的には、ヨーロッパ諸国で研究された、いわゆる伝統的地誌学の中心概念を明らかにし、伝統的地誌学が目指した概念的フレームワークを明確にするとともに、新しい地誌学における中心概念と比較し、新しい地誌学が目指すべき方向性を見いだすことを試みた。

この結果、以下の点が明らかになった。

(1) 地理学全般の研究動向から地誌学の位置づけや地理学と地誌学の関係を検討した研究はこれまでも数多くあるが、いずれも学問の鍵概念となるパラダイム変化との比較が中心であった。本研究においても基本的に同様な方法で行い、伝統的地理学と新しい地理学の動向を整理することにより、地理学の潮流における地誌学の位置づけを再検討した。それによれば、新しい地誌学の攻勢により伝統的な地理学の一分野に属する伝統的な地誌学は陰が薄くなるが、その後もフランスやドイツを中心として地誌的モノグラフは刊行され続けていることは注目に値する。しかし、そのような地誌的モノグラフが地誌学

研究の進歩にどのように貢献したかについては論じられることは少なく、このため地誌的モノグラフの評価はなされず、それと連動する形で地誌学も低い評価しか得られなかったと考えられる。また、地理学の社会的意義を考えた場合、社会の要求は伝統的地誌学を評価しているにもかかわらず、地誌学自身がその要求に答えてこなかったと考えられる。

(2) このように伝統的地誌学は衰退していったが、1970年代後半から地誌学は再評価されるようになった。その理由としては、地誌学の社会的有用性の再評価、科学全体のパラダイム変化に対する地誌学への期待、系統地理学のなかでも実証主義地理学の反省とアンチテーゼとしての地誌学の見直し、などがあげられる。このように、地理学や科学全体のパラダイムの変化を契機として地誌学は再び脚光を浴び、「新しい地誌学」として再評価、再出発するに至った。

(3) 地誌学自身のこれまでの研究をふりかえってみた場合、伝統的地誌学においてはVidalに端を発する景観研究と生活様式に関する研究が一つの潮流を成している。これらの研究では社会における人間の自然への働きかけに対して十分に答えることができなかったと考えられる。この結果、景観における自然とその法則に関する研究は自然地理学に任せられ、人間活動の主要な原動力となる資本は「空間」との関係性を明らかにすることにより、人文地理学の系統諸分野へと細分化していったと考えられる。系統諸分野は周辺科学の方法論を採用した結果、1970年代後半においては研究者の立場が「実証主義者」「リベラリスト」「ヒューマニスト」「マルクス主義者」「構造主義者」などに分割され、地誌学の立ち入るすきがなくなっていたと考えられる。

(4) しかし、従来の伝統的地誌学に対して、その発想を転換させた新しい地誌学では、解明すべき問題に対して新しい概念的フレームワークが必要であると考えられる。本稿ではその概念的フレームワークとして「世界システム」「空間組織」「人口」「社会構造」「集落システム」「コミュニケーションシステム」などについて検討した。新しい地誌学はこれらを軸にして新たな社会的問題をとき明かす学問分野として、その有用性を発揮しつつあるといえる。

このように、新しい地誌学は現代地理学における中心的課題との関係を保ちながら、独自の使命を見いだそうとしており、実際に欧米諸国では多くの成果が得られている。これに対して、わが国では「新しい地誌学」をうたった研究成果は極めて少なく、その進展が願われる。一方、伝統的な地誌学を踏襲する各地の地誌書や論文は

枚挙に暇がない。欧米諸国においても伝統的な地誌学の存在意義が否定された訳ではなく、特に社会的ニーズや教育的意義が大きいことは今後の地誌学の有効性を確かなものにする原動力となる可能性がある。

今後は伝統的な地誌学と新しい地誌学の役割の差、双方の概念を踏まえた上で地誌学としての統一的概念と方向性、さらには系統地理学とのあり方など、地誌学の学問としての位置づけを検討する必要性があるのではなからうか。

【付記】

本研究は、1996・1997（平成8・9）年度文部省科学研究費補助金による基盤研究(c)(2)「欧米諸国における地誌学の研究動向」（研究代表者：森川 洋，課題番号：08680167）の成果の一部であり、その研究成果報告書『欧米諸国における地誌学の研究動向』所収の論文を一部改稿したものである。

本稿の作成にあたり、福山大学教授の森川 洋先生には終始ご指導を頂いた。また、文献収集などで広島大学総合地誌研究資料センターの佐藤崇徳氏に、原稿校正などで島根大学教育学部学生の小豆沢達生君にそれぞれお世話になった。記して御礼申し上げます。

注

- 1) Kuhnが提唱した科学革命の思想が地理学の変革にいかなる影響を与えたかに関する研究は数多くあるが、Johnston(1991)の著書にも新しい地理学の成立に対して理論的にどのような影響を与えたのかについて、詳しく述べられている。
- 2) 伝統的地誌学については明瞭な定義はないが、一般的にはHettner(1927)やHartshorne(1939)などが目指した地誌学を指す。
- 3) この点について森川(1982)や森川(1992)などに詳しく記されている。
- 4) 例えば、人文地理学会の会誌「人文地理」に毎年3号に掲載される学会展望などを見ると、系統地理学の諸分野に関する研究動向が大幅に紙面を割き、地誌学に関する話題は末尾にわずかに記されているに過ぎない。
- 5) このことについて、森川(1992)も特に意識して研究動向をまとめている。
- 6) 計量革命に関する一連の動向については杉浦(1987)に詳しい。
- 7) このことについては、Grigg(1965)も述べている。

文献

- 加藤武行(1987)：地理学史的にみた地理学の特質、『島根地理学会40周年記念誌』島根地理学会，pp. 26-35.
- 川島哲郎(1986)：経済地理学の課題と方法，川島哲郎『経済地理学』大明堂，p. 4.
- 杉浦芳夫(1987)：Ackermanとアメリカ地理学の「体制化」—計量革命に関する一考察—，地理学評論，60，pp. 323-346.
- 野上道男・杉浦芳夫(1986)：『パソコンによる数理地理学演習』古今書院，216p.
- 野澤英樹(1977)：新しい地理学，木村辰男・坂本英男・高橋 正『現代地理学の基礎』大明堂，p. 31.
- 野間三郎(1976)：『近代地理学の潮流—形態学から生態学へ—』大明堂，218p.
- 森川 洋(1982)：ドイツ地誌学の最近の研究動向，石田寛教授退官記念事業会『地域—その文化と自然』福武書店，pp. 495-507.
- 森川 洋(1992)：地誌学の研究動向に関する一考察，地理科学，47，pp. 15-35.
- 森川 洋(1997)：ドイツにおける地誌学の研究動向，地誌研年報，6，pp. 15-50.
- 森川 洋(1998)：『欧米諸国における地誌学の研究動向』文部省科学研究費補助金研究成果報告書，134p.
- Blaut, J. M. (1962)：Object and relationship. *The professional geographer*, 14-6, pp. 1-7.
- Brunn, S. D. and Williams, J. F. (1983)：*Cities of the world, world regional development*. New York, Harper & Row, 365p.
- Bunge, W. (1962)：*Theoretical geography*. Lund Studies in Geography, Ser. C, General mathematical geography, 1, Lund : C. W. K. Gleerup. (西村嘉助訳(1970)『理論地理学』大明堂，215p.)
- Buttimer, A. (1971)：*Society and Milieu in the French geographical Tradition*. Rand McNally & Co, 452p.
- Buttimer, A. and Claval, P. (1987)：IGU discussion on geography today, yesterday and tomorrow. *The professional geographer*, 39-2, pp. 221-223.
- Claval, P. (1984)：France. in Johnston, R. J. and Claval, P. (eds.)：*Geography since the second world war; an international survey*. London, pp. 15-41.
- Dicken, P. (1986)：*Global shift: Industrial change in a Turbulent world*. London, Harper & Row, 215p.
- Friedmann, J. (1986)：The world city hypothesis. *Development and change*, 17, pp. 69-83.

- Gregory (1978) : *Ideology, Science and Human Geography*. London, Hutchinson, 395p.
- Grigg, D. (1965) : The logic of regional systems. *A.A.A.G.*, 55, pp. 465-491.
- Grotewald, A (1971) : The growth of industrial core areas and patterns of world trade. *A.A.A.G.*, 61, pp. 361-370.
- Guelke (1977) : The role of laws in human geography. *Progress in human geography*, 1, pp. 376-386. (松井久美枝訳 (1981) : 人文地理学における法則の役割. 千田 稔訳編『地図のかなたに - 論集 景観の思想 -』地人書房, pp. 25-47.)
- Hartshorne, R. (1939) : The nature of geography. A critical survey of current thought in the light of the past. *A.A.A.G.*, 24. (野村正七訳 (1957) : 『地理学方法論』朝倉書店, 583p.)
- Hettner, A. J. (1927) : *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Ferdinand Hirt, Breslau, 463S.
- Hoekveld, G. A. (1990) : Regional geography must adjust to new realities. in Johnston, R. J., Hauer, J. and Hoekveld, G. A. (eds.): *Regional geography*. London, Routledge, pp. 11-31.
- Humbert, M. (1986) : *La socio-dynamic industrialisante, une approche de L'Industrialisation fondée sur le concept de système industriel mondial*. *Revue tiers monde*, 17-107, pp. 537-554.
- Johnston, R. J. (1982) : The local state and the judiciary : Institutions in American suburbia. in Flowerdew, R. (ed.) : *Institutions and Geographical patterns*, London, Croom Helm, pp. 255-288.
- Johnston, R. J. (1986) : The world is our oyster. *Trans. Inst. Brit. Geogr.*, NS, 9, pp. 443-459.
- Johnston, R. J. (1991) : *Geography and geographers - Anglo-American human geography since 1945 (Fourth edition)*. London, Edward Arnold, 369p. (立岡裕士訳 (1997) : 『現代地理学の潮流 (上)』地人書房, 284p.)
- Johnston, R. J., Hauer, J. and Hoekveld, G.A. (eds.) (1990) : *Regional geography. Current developments and future prospects*. London and New York, Routledge, 216p.
- Kostrowicki, J. (1975) : A key-concept : Spatial organization. *International social science journal*, 27, pp. 328-345.
- Labasse, J. (1955) : Les capiteaux et la Région, Etude Géographique. in Labasse, J : *Essai sur le Commerce et la Circulation des Capiteaux dans la Région Lyonnaise*. Paris, A. Colin, 346p.
- Labasse, J. (1972) : L'Espace Financier. in Labasse, J : *Analyse Géographique*. Paris, A. Colin, 118p.
- Lichtenberger, E. (1984) : The German-speaking countries. in Johnston, R.J. and Claval, P. (eds.) : *Geography since the second world war: An international survey*. London, Croom Helm, pp. 156-184.
- Martin, J. P. and Nonn, H. (1980) : La notion d'Intégration Régionale. in Martin, J. P. and Nonn, H. : *Analyse Régionale, Travaux de L'Institut de Géographie de Reims*. pp. 33-48, pp. 41-42.
- Schaefer, F. K. (1953) : Exceptionalism in geography : a methodological examination. *A.A.A.G.*, 43, pp. 226-49. (野間三郎訳 (1976) : 地理学における例外主義 : その方法論的吟味. 野間三郎『空間の理論』古今書院, pp. 14-47.)
- Stewig, R. (ed.) (1979) : *Problem er Länderkunde*. Wiss. Buchgesell, S.1-35.
- Thomale, E. (1972) : Sozialgeographie, eine Disziplin-geschichtliche Untersuchung zur Entwicklung der Authropogeographie. *Marburger Geographische Schriften*, 5, Marburg / Lahn.
- Thrift, N. J. (1986) : The geography of international economic disorder. in Johnston, R.J. and Taylor, P. J. (eds.) : *A world in crisis? : Geographical perspectives*. Oxford, Basil Blackwell, pp. 12-67.
- Vidal de la Blache, Paul (1896) : Principes de la géographie générale. *Annales de Géographie*, 5, pp. 129-142.
- Vries, J. de (1984) : *European urbanization 1500-1800*. London, Methuen, 548p.
- Wallerstein, I. (1974) : *The modern world-system : Capitalist agriculture and the origins of the world-economy in the sixteenth century*. New York, Academic Press, 298p.
- Whittlesey, D. (1954) : The regional concept and the regional method. in James, E.P. and Jones, C.F. (eds.) : *American geography, Inventory and prospect*. New York : Syracuse university Press, pp. 19-68.
- World Commission on Environment and Development (1987) : *Our common future*. Oxford University Press, 82p.